

NEWS LETTER

日本の歴史研究を次のステージへ

VOL. 4
2018.3



「人文科学とコンピュータシンポジウム2017」(じんもんこん2017)

CONTENTS

■ 総合資料学と大学連携	西谷 大	2-3
■ 国立歴史民俗博物館共同研究		
「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」		
・これまでの活動		
人情報ユニット研究会 第2回	橋本雄太	4
人情報ユニット研究会第2回「歴史資料デジタル記録として何を記述すべきかー日本とアジアと世界ー」に参加して	島津美子	5
地域連携・教育ユニット研究会 第1回	天野真志	6
地域連携・教育ユニット研究会 第2回	天野真志	7
Digital Humanities 2017 (DH2017) にて総合資料学の報告	後藤 真	8
15th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS2017) で報告	渋谷綾子	8
第28回日本資料専門家欧州協会年次大会 (EAJRS 2017) で報告	橋本雄太	9
PNC2017にて総合資料学システムに関する研究発表	後藤 真	9
国際研究集会「文化財のデジタル化とその保存・活用ーイギリスと日本ー」を開催	後藤 真	10
歴史民俗資料館等専門職員研修会で総合資料学の講義を実施	後藤 真	10
「山形民俗映像フォーラム・黒川能(王祇祭)1954年/2006年」を開催	内田順子	11
じんもんこん2017歴博共催企画セッションを開催	橋本雄太	11
・他機関における活動のご紹介		
山形大学附属博物館と総合資料学 90年のさらにその先へ	山形大学附属博物館 佐藤 琴	12
総合資料学におけるモノとしての理工系資料の可能性	東京工業大学博物館 阿見雄之	13
■ 研究メンバー一覧		14
■ メタ資料学研究センター・メンバーの紹介		15
■ 2017年9月~2018年度 メタ資料学研究センターの活動		16

総合資料学の今

「総合資料学」とは、主に大学や歴史系博物館が持つ資料を多様な形で分析・研究するための学問である。この2年間の研究は、大きく2つの方向から進められてきた。

第1の研究は、資料から得られる多様な情報を、横断的に検索しつつバックアップ機能も持たせる情報基盤環境の整備である。この2年間の研究で、基礎的なシステム構築のめどは立ち、現在は実際の資料を使ったモデル構築を進めている。

第2の研究は、モノとしての歴史資料に注目し、文系・理系の研究者が集中的に研究討議するものである。例えば国立歴史民俗博物館（以下、歴博）が開館当初から取り組んできたのが正倉院文書の複製事業である。正倉院文書の重要性は言うまでもないが、研究会では、これまで行われてこなかった正倉院文書を複製して利用する意義や今後の研究の可能性について討議を行った。



歴博での集中講義（千葉大学授業）

もう一つ、「聆濤閣集古帖」の学際的な研究を例にあげたい。これは摂津国菟原郡住吉村呉田（現在の兵庫県神戸市東部）の江戸時代の豪商・吉田家により編纂された古器物類聚の模写図譜である。さながら前近代における「総合資料学」の様相を呈している。この「聆濤閣集古帖」を様々な専門分野の研究者により、現在の研究水準からあらためて総合的に調査・検討している。その文化的な背景を把握して、現代の歴史研究を顧みる機会にするという目的のもと、この2年間で一定の成果を上げてきた。

総合資料学の進展とともに、これまでにない新たな研究の展開が、今まさに起きようとしている。

歴博と大学連携

歴博は、日本だけでなく海外の多くの大学と連携協定を結んでいる。第3の研究課題は、総合資料学が培った知と研究の集積を協定を結んだ大学等へ、いかにして還元するか、また大学共同利用機関としての役割である人材育成にどのような貢献ができるのかにあり、その仕組み作りと実践が求められている。

歴博は歴史学・考古学・民俗学・情報資料学の調査研究の発展を担う機関ではあるが、研究成果を総合的に展示する博物館機能も併せ持っている。つまり大学等への貢献は、研究と教育と博物館を融合させ、総合化したコンテンツを作り上げ、それを提供できるかがポイントだと考えている。その仕組み作りの一端として「モバイルミュージアム」と「歴博での集中講義」を紹介したい。

1. モバイルミュージアム

「モバイルミュージアム」とは「簡易移動型展示什器」のことで、現在制作中である。屏風型で（総重量15キロ程度）、



歴博・国語研共同開発の移動型什器（モバイルミュージアム）（左）歴博特集展示（国際展示）「台湾と日本」／（中央）広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」／（右）国立国語研究所「消滅の危機にあることばと方言」
* 左と中央は情報・システム研究機構での展示、右は国立国語研究所エントランスホールでの展示状況

組立工程 歴博特集展示（国際展示）「台湾と日本」（鯨絵）（*右下は台上のコンテンツの一部）



折りたたみが可能であり、輸送が簡便で、博物館の特別な展示室でなくても、大学の教室や行政機関のホールや会議室でも展示可能であるという特徴を持つ。

今年度制作した什器の内容は、昨年度歴博で行った特集展示（国際展示）「台湾と日本」と、機構基幹研究プロジェクト「広領域連携型基幹研究プロジェクト：日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の成果と、同じ大学共同利用機関である国立国語研究所の長年の研究成果「消滅の危機にあることばと方言」である。

これを来年度は、神奈川大学、弘前大学、歴史民俗系博物館協議会全国大会、鹿児島大学、松江市等で展示や授業に活用してもらい、その効果についてモニタリングを行う予定である。さらにその調査結果をもとに次のモバイルミュージアム制作に反映させる。つまりモバイルミュージアムそのものも研究の可視化・高度化の研究対象となるのである。

2. 歴博での集中講義

もう1つの仕組みが、全国の大学の学生に参加してもらって行う集中講義である。総合資料学を中心とする歴博の共同研究や研究者の知の蓄積を、歴博での集中講義という方法で行い、これにより学生の育成に貢献できる仕組みを作りたい。

歴博で集中講義を行うメリットはいくつかある。第1に共同利用機関としてこれまで国内外の大学や研究機関と行ってきた共同研究の成果の蓄積に加えて、歴博内外での歴史学・民俗学・考古学・情報資料学といった多様な分野



の研究者ネットワークがあることにより、学際的で質の高い講義が可能になることである。

第2にさまざまな大学の学生が一度に講義をうけることで、学生同士の学問的な刺激が醸成されると期待できることである。また、学生にモバイルミュージアムを用いた企画展示を制作してもらおうという、アクティブ・ラーニングも可能ではないかと考える。これにより、学生に資料に基づいた研究の成果と大切さを勉強してもらおうとともに、歴博の博物館機能を活かした研究成果発信の実践的教育に繋げることができるだろう。

総合資料学のエンドポイントの1つは、歴博の持つ研究、教育、博物館機能を最大限に生かし、研究の可視化・高度化の実践と大学の機能強化に寄与することにある。いかにすれば総合資料学を推進することが、最終的には歴博独自の大学連携を創出することに繋がると考えている。

これまでの活動

人文情報ユニット研究会 第2回

橋本 雄太

日時 2017年9月26日(金) 10:00~12:00

会場 京都大学国際科学イノベーション棟 シンポジウムホール

2017年9月26日、人文情報ユニットの第2回研究会が開催された。

今回の研究会は、9月25日から29日にかけて京都大学で開催された、デジタル保存に関する国際研究集会 iPRES 2017のプレ・カンファレンスイベントとして開催された。このため iPRES の参加者を中心に日本国外の研究者も多数出席があり、研究報告は同時通訳を通じて英語と日本語で提供された。

今回の研究会タイトルは「Digital Curation of Historical and Cultural Resources in Japan 2 : 歴史資料デジタル記録として何を記述すべきかー日本とアジアと世界ー」である。日本国内で歴史および考古資料のデジタル保存に関わる3名の研究者をスピーカーに迎え、歴史学・文化財科学・情報学の観点から、資料のデジタル化にまつわる実践的問題を論じるとともに、文化財デジタル化をめぐる社会的・理念的問題についても共有・議論する場となった。

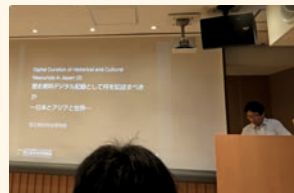
最初のスピーカーである師氏の発表は、2008年から氏が学生とともに取り組んでいる文化遺産の3次元CG復元事業を紹介し、復元作業の意義について論じるものであった。特に、2010年と2017年に実施された京都市中京区梅忠町の京町家建築の3次元CG復元の事例を中心に報告がなされた。文化財の復元にあたっては、復元に必要な完全な資料が残されていることは稀である。欠落した情報は、各種の資料をもとに検討を重ね、学術的に妥当と考えられる推測によって補完する必要がある。現代のデジタルアーカイブも世界全体を記録するものではない。アーカイブに含まれる資料には必ず欠落が生じ、その欠落部分にこそ大切な情報が含まれるかもしれない。その意味で復元とは「欠落」に耳を傾ける行為でもある。師氏は、歴史学者ヘイドン・ホワイトによる「歴史的な過去」と「実用的な過去」の区分を引き、一方的に「実用的な過去」を語ろうとする人々に対する異議申し立てとしても、復元作業は意義を有するのではないかと述べた。

アートル氏からは、縄文時代の竪穴式住居など、考古学的建造物の復元についての問題が提示された。アートル氏は、こうした復元建造物のデータベースを構築しており、これまで900件以上のデータを収集している。こうした復元建造物をめぐる大きな問題のひとつは、建造物の実際の姿や材質、建築技術についての情報が極めて限られているにもかかわらず、時として観光資源としての活用を目指す運動や、国家・民族をめぐる政治的意図が、復元工程に影響を与えてしまう点にある。その意味で、考古学資料の復元はきわめて現代的・社会的・実践的な問題でもある。

島津氏からは、博物館における有形・無形文化財の保存・復元事業についての紹介があった。近年は保存手法と保存形式のデジタル化が進んでいるが、まだまだ問題が多いのが現状である。例えば国立歴史民俗博物館では、1988年から無形の民俗文化財の記録映像を保存する活動にあっているが、保存フォーマットの乱立が資料管理を難しくしており、また公開にあたって被撮影者の肖像権や知的財産権を侵害する恐れがあるため、要望は多いものの資料のインターネット公開に踏み切れないという課題に直面している。島津氏が挙げた問題は、文化資料デジタル化事業に通底する課題であり、今後デジタル化

に携わる人間が長い時間をかけて解決していかなければならない。

いずれの発表者の報告も、歴史的・考古学的資料の保存と復元に関わる社会的問題に触れるものであったことは、極めて興味深いことであった。とりわけ文化財の復元は、失われた資料の情報を学術的な解釈や推論によって埋める工程を含むが、その過程が社会的要請によって影響を受けることがあるという見解は三氏の一致するところであった。文化財の保存と復元において学術的独立性を担保するために、デジタル技術がいかなる役割を果たし得るかについては、技術的・社会的観点から引き続き議論が必要であろうと思われる。このような問題を浮かび上がらせる意味で、非常に意義深い研究会となった。



後藤による趣旨説明



総合討論の様子
(左から師、アートル、島津)



会場の様子



ライトニングトークの様子
(渋谷)

研究会の内容

- 趣旨説明** 後藤 真 (国立歴史民俗博物館)
- ◆ **報告1** 「未来への異議申し立てのために 3次元復元CGを作りながら考えていること」
師 茂樹 (花園大学)
 - ◆ **報告2** “Reconstructed Buildings as Archaeological Archives Problems in the Preservation of the Recent Past”
ジョン・アートル John Ertl (金沢大学)
 - ◆ **報告3** 「文化財の保存とデジタルデータ」
島津美子 (国立歴史民俗博物館)
- 総合討論**
司会：後藤 真 (国立歴史民俗博物館)
パネリスト：師 茂樹、ジョン・アートル、島津美子

人文情報ユニット研究会第2回「歴史資料デジタル記録として何を記述すべきか—日本とアジアと世界—」に参加して

国立歴史民俗博物館 島津 美子

2017年9月26日、国際研究集会iPRES (International Conference on Digital Preservation) のプレ・イベントとして行われた日本セッション (Digital Curation of Historical and Cultural Resources) のひとつ「歴史資料デジタル記録として何を記述すべきか—日本とアジアと世界—」に参加した。この研究会は、第2回人文情報ユニット研究会として、後藤真氏 (国立歴史民俗博物館 以下、歴博) がオーガナイザーを務めた。

1つめの発表は、花園大学の師茂樹氏による「未来への異議申し立てのために 3次元復元CGを作りながら考えていること」であった。これまでに実施された3次元復元の事例として、安土城や平安京羅城門などが紹介された。つづいて、梅忠町文書から京町家を復元した事例を通し、図面などの2次元の歴史資料より3次元復元を行うことで、新しい視点からの資料の検証が可能になったり、仮説が形成できたりといった歴史研究への寄与が示された。また、視覚化することによる教育効果や、地域活性化のコンテンツとして利用されるなどの、研究成果の活用についても述べられた。一方で、すべての資料をアーカイブすることはできず、実際にはこうしたアーカイブできない部分こそが重要な情報となりうることへの言及があった。復元のために収集される情報には、復元に関わる人たちの考えや心情も含まれ、こうした部分を文字資料として残すことは難しい。しかし、復元されるデジタルコンテンツには、多少の差はあれ関係者の意図や意向が反映されることになる。このため、復元を行うことは、こうした目に見えないことにも意識を向けることになるという。

私たちが過去をみるとき、それは、現代の考え方に基づいている。たしかに、残すべきもの、あるいは、残したくないもの、良いものとされるもの、あるいは負とみなされるもの、というような評価は、こんにちの私たちがそう思っているのだから、それさえも、各自のものの見方や立場によって異なるであろう。アーカイブとして残していくものが、学術的に事実に近いとしても、それが必ずしも関係者が残していきたいものとは一致するとは限らない。歴史的な建築物や京町家を復元し、これを地域活性化に利用した際には、研究者側の一方的な視点だけでなく、地域住民ら関係者の意見もとりにれたそうである。こうした歴史資料の3次元復元データは、復元の過程で文字資料としては残らない現在の考え方を内包し、また、3次元CGという現代技術を表す時間軸をも示すアーカイブコンテンツであるように感じられた。

2人目の発表者、金沢大学のジョン・アートル氏からは、「Reconstructed Buildings as Archaeological Archives Problems in the Preservation of the Recent Past」(考古学アーカイブとしての復元建造物 近い過去を保存する際の課題 [筆者訳]) と題した発表があった。アートル氏は、縄文時代から古墳時代を中心とした考古学遺跡とそこに復元された住居のデータベース構築に携わっている。収集するデータには、遺跡の名称、時代区分、遺跡公園名や博物館名、住所、位置情報 (GISに基づく) といった基本的な情報のほかに、現在の遺跡の管理者や復元住居がいつ、どのような考古学的見地に立って復元されたのかが含まれる。復元住居に関していえば、どこにあるのか、どのくらいの数があるのか、他の遺跡のものとの比較研究や住居の形式といった情報は、まとめられていないのが現状のようである。実際、遺跡の情報については、発掘報告書から知ることができるが、復元住居については、別の資料を当たったり、実際に現地へ赴いたりして情報を得ているとのことである。このように、遺跡そのものについての研究はな

されているものの、復元住居に関する情報は乏しく、データ収集の難しさが述べられた。このことは、発掘で見つかるものは学術的な目的のために詳細な記録が残される一方、住居が復元されてしまうとその過程で集められた情報はおろそかにされてしまう可能性を示唆している。復元住居は、形としては残っていないものを可視化することで、遺跡の存在を明示し、また理解を深めることにもつながるであろう。他方で、造られた経緯や根拠が失われてしまえば、時代や文化の間違った理解や解釈につながりかねない。類似した資料のデータベース化は、学術資料として、あるいは関係者への情報提供のみでなく、実物資料だけが表層的に残されることを防ぐという観点においても有用のように思われた。

最後に、自身は「文化財の保存とデジタルデータ」と題して発表を行った。日本の文化財の保存は、文化財保護法に則り行われている。特徴として、芸能やお祭りといった無形の文化的所産や、文化財を維持していくための技術をも早くから保護の対象にしていることが挙げられる。無形の文化財は、継承者や団体を保護するとともに、もっぱら映像や音声資料として残されている。歴博でも、民俗研究の一環として映像制作を行っている。こうした資料は、構成や編集の際に、研究者の解釈、関係者の意向といったものが含まれる。この点において、師氏の発表にあった3次元復元のアーカイブとの共通性がみいだせる。

他方、有形の博物館資料の保存修復については、これまで主に資料属性や将来にわたって残していくための調査研究が行われてきた。近年では、写真などの記録資料や、どのように現代まで伝わってきたのかといった修復の履歴等も、保存や研究の対象となっている。こうした動きは、復元住居の設置根拠を含めた情報のデータベース化に近く、現在の利用・活用も資料の一部としてとらえられているといえよう。

冒頭の国際研究集会iPRESは、デジタルデータの長期保存に関する諸課題を議論する学術会議であり、参加者は、図書館員、アーキビスト、情報技術者、企業、大学の研究者などのことである。このセッションでは、歴史資料を扱うとのことから、文化遺産や博物館になじみのある参加者も多かったが、質問では、デジタルデータの公開範囲や手法、将来におけるデータへのアクセスの可能性など、長期的なコンテンツ利用に対する関心が示された。また、歴史資料に関するデータを収集・作成している側としては、膨大な量のデジタルデータを今後どう精査し、活用していくのか、時代とともに変わる可能性のある解釈や、現在のコンテンツから派生する研究成果をどう扱っていくのかなども、あわせて考えていくことが重要であるように感じた。

〈参考資料〉

- スマホで再現！蘇る西寺・羅城門 <http://www.ar-rajomon.jp/>
Reconstruction DB (復元住居データベース) <https://r.bloxi.jp/>
内田順子. (2015). 映像の共有と諸権利. 社会学評論, 65(4), 504-520. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsr/65/4/65_504/_pdf
iPRES 2017 (研究集会ホームページ: <https://ipres-conference.org/>)
テーマ: "Keeping Cultural Diversity for the Future in the Digital Space —from Pop-Culture to Scholarly Information (多様な文化をデジタル空間に保存して未来へ伝える—ポピュルチャーから学術情報まで)"

地域連携・教育ユニット研究会 第1回

天野 真志

日時 2017年9月6日(金) 13:30~18:00
 9月7日(土) 8:30~18:00
 9月8日(日) 8:30~14:30

会場 小城市立歴史資料館(桜城館)

2017年9月6日から8日の3日間、地域連携・教育ユニットの第1回研究会が、歴博共同研究「中世日本の地域社会における武家領主支配の研究」との合同で開催された。

佐賀県小城市で開催された今回の研究会は、中世武士の移動に焦点を当て、東国武士が九州地域へ移動し、定着化する契機とその捉え方について検討した。さらに、中世後期における肥前千葉氏の活動について、関連文書の分析を通じた論点整理が行われ、地域社会における千葉氏による支配形態について報告があった。これらの報告を踏まえ、中世段階で肥前国に定着した武士の実態について議論が繰り広げられた。

その後、肥前千葉氏に関連する寺社や遺構を踏査し、考古学的遺物と文献調査双方を踏まえた中世武家領主支配のあり方について、知見を深める研究会となった。

文献調査だけでなく、中世期の遺構や史跡踏査も踏まえて空間的な地域像の復元を展望した本研究会を通して、地域社会に伝来する多様な要素を含み込んだ歴史文化研究の可能性が看取された。本研究会の議論によって、定着した西国武士が形成した当該地域の複合的な歴史文化像が展望されるとともに、歴史文化の蓄積を通じた地域社会像のあり方についても考えることができた。



研究会の様子(1)



研究会の様子(2)



研究会の様子(3)



踏査の様子

研究会の内容

9月6日

研究会 於小城市立歴史資料館(桜城館)

◆ **報告1** 「御家人の西遷について」
 高橋典幸(東京大学大学院)

◆ **報告2** 「中世後期の肥前千葉氏一南北朝・室町期を中心の一」
 大塚俊司(長崎歴史文化博物館)

総合討論

踏査 北浦踏査(延命寺・北浦妙見社)

9月7日

踏査 小城郡故地踏査

須賀神社、千葉城、光勝寺円通寺、千葉宗胤墓、本龍院、見明寺、妙見社ほか

9月8日

踏査 小城郡・神埼郡故地踏査

肥前国分寺・春日城、勢福寺城、姉川城、直鳥城、蒲田江

日時 2017年11月13日(月) 10:00~16:30

会場 神戸大学文学部

2017年11月13日、地域連携・教育ユニットの第2回研究会が、科学研究費基盤研究(S)「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて」(研究代表：奥村弘)研究グループとの共催にて開催された。

「日伊の文化財情報システムに関する研究会」と題した本研究会では、イタリア全土を網羅した文化財危険地図の構築と運用状況を踏まえ、日本における文化財防災とデジタル情報の活用に関する取り組みについて、現状と今後の展望について議論を行った。

イタリアでは、文化財危険地図システム“Carta del Rischio”を文化財保護政策の一環として運用している。イタリアの文化財危険地図は、カタログに記載された文化財の自然災害などに対するリスクを判定し、文化財の保護に向けて様々な専門家が即時に対応できるシステムとして機能しており、カカーチェ氏より同システム構築と運用状況について基調講演を得ることができた。

その後、松下正和氏より2009年に兵庫県を襲った台風被害の教訓をもとにして作成された河川域の浸水シミュレーションを用いて、レスキュー活動を契機とした防災対策の検討についての発表が行われた。

後藤真氏からは、国立歴史民俗博物館が進めている文化財情報のデジタル化事業と防災対策への活用に向けた検討について報告があり、文化財情報の集約と活用を進める上での課題と、データを公開することで展開される多様な可能性について提起された。

イタリアで長年蓄積されてきた文化財情報のシステム化と活用事例を踏まえ、日本でも関連した取り組みが進行しつつあることが本研究会で整理された。一方で、情報の管理や活用に向けた課題、さらにそれらを実用する上での問題などもあらためて認識することができた。



趣旨説明



総合討論 (左からカカーチェ、松下、後藤)

研究会の内容

開会挨拶 奥村 弘 (神戸大学大学院人文学研究科)

西谷 大 (国立歴史民俗博物館)

趣旨説明 天野真志 (国立歴史民俗博物館)

基調講演 「イタリアの文化財危険地図システムとその運用について」
カルロ・カカーチェ Carlo Cacace (イタリア国立保存修復高等研究所)

◆ **報告 1** 「兵庫県佐用町における浸水シミュレーションの文化財防災への活用」
松下正和 (神戸大学地域連携推進室)

◆ **報告 2** 「日本における文化財情報のデジタル化と防災への活用の検討」
後藤 真 (国立歴史民俗博物館)

総合討論

司会：天野真志 (国立歴史民俗博物館)

パネリスト：カルロ・カカーチェ、松下正和、後藤 真

Digital Humanities 2017 (DH2017) にて総合資料学の報告

後藤 真

2017年8月8日～11日、Digital Humanities 2017 (DH2017) がカナダ・モントリオールの McGill University で開催された。

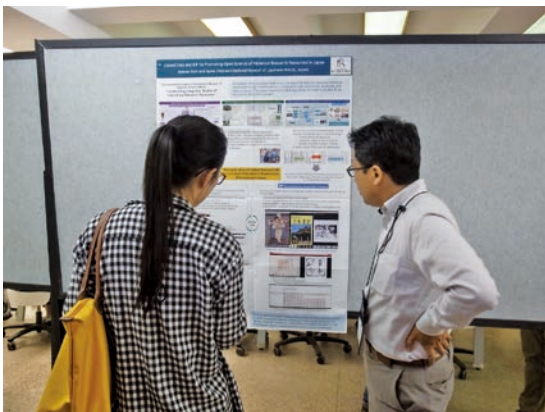
今回の学会では世界各国から約890名の参加があり、学会期間中は8時から17時ごろまで同時に20以上のセッションが進行されるなど、大規模な学会であり、人文情報学に関しては最大の国際会議である。

メタ資料学研究センターから後藤・渋谷が参加し、世界各国の人文情報学にかかわる研究者に、総合資料学の現在までの成果と、システムに関するポスター発表（8月9日実施）を行った。複数

の研究者との討論を行い、とりわけシステムの公開時期や手法などについての質問を受けた。そのなかで、今後の活動に関して、メタデータなどの分析の可能性などを含めた示唆を得た。

ポスター発表

Makoto Goto and Ayako Shibutani. 2017. *Linked Data and IIIF for Promoting Open Science of Historical Research Resources in Japan.*



ポスター発表（後藤）



ポスター発表（渋谷）

15th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS2017) で報告

渋谷 綾子

2017年8月30日～9月2日、15th International Conference of the European Association for Japanese Studies (第15回ヨーロッパ日本研究協会国際会議、EAJS2017) がポルトガル・リスボンの The Universidade NOVA (Faculty of Social Sciences and Humanities (FCSH)) で開催された。

大会組織委員会によると、今回の学会は世界各国から1200名を超える日本研究を専門とする研究者の参加があったという。8月30日午後から公式に開催されたが、プレイベントとして、リスボ

ン市内の博物館や教会、宮殿や図書館などを巡るツアーやさまざまなワークショップが8月28日から多数行われていた。また、学会期間中は毎日9時から17時半ごろまで28ほどのセッションが同時に進行される非常に大きな学会だった。

メタ資料学研究センターからは渋谷が参加し、9月1日午後「S7_27: New Perspectives from Archaeology (考古学からの新展開)」において、総合資料学の紹介とあわせて自身の研究成果について口頭発表を行った。総合資料学や最近進めている紙の分析について多くの質問を受け、国際的な共同研究の可能性について意見もいただくことができた。

発表セッション以外で参加したセッションには、江戸時代における災害史や防災に関するもの、日本食をベースとした民俗研究などもあり、今後の総合資料学の活動につながるような話も参加者たちとかわすことができた。



口頭発表の様子

口頭発表

Ayako Shibutani. 2017. *Reevaluating Plant Food Cultures during the Jomon Period Using Starch Granule Assemblages from Northern Japan.*

第28回日本資料専門家欧州協会年次大会（EAJRS 2017）で報告

橋本 雄太

2017年9月13日～16日、ノルウェー・オスロ大学で第28回日本資料専門家欧州協会年次大会（EAJRS 2017）が開催された。

今回の大会テーマは“Digital Strategies for Japanese Studies: Theories and Practices”であり、日本資料専門家の間でもデジタル技術活用ノウハウの重要度が高まっていることが伺える。大会組織委員会の発表によると、20か国から96名（うち46名は日本からの参加）の参加があったとのことである。欧州に加えて、北米からも多くの日本資料専門家が来場していた。現地オスロは雨の予報であったが、幸いにして大会期間中は比較的好天に恵まれた。

メタ資料学研究センターからは後藤・渋谷・橋本が参加した。国立歴史民俗博物館のメンバーがEAJRSに参加するのは昨年続き2度目となる。大会期間中は、総合資料学の取り組みを紹介するブース展示を行い、またブースを訪問した欧州や北米の日本専門司書と意見を交換した。最終日の9月16日には、後藤が口頭発表を行い、「総合資料学の創成」プロジェクトの現在の進捗と今後の計画について報告した。

口頭発表では、大会テーマを受けて、欧州の各機関に所蔵されている日本関係資料のデジタル化とその活用についての報告が多数見られた。欧州の各大学も予算状況は非常に厳しく、クラウドソーシングなど様々な工夫を検討しているようである。

メタ資料学研究センターのブースに来訪した出席者からも、総合資料学が推し進める博物館資料のデジタル化事業に関する質問が集中した。海外の日本資料専門家が日本国内の資料デジタル化事業に高い関心を払っていることは以前から認識していたが、世

界的なデジタル人文学の流行を受けて、デジタル化への関心は更に高まりつつあるようである。博物館資料のデジタル化にあたっては、国内だけでなく海外の研究者を想定することが重要であることを改めて実感した。

今回の大会では全発表がオスロ大学のチームによって録画されており、発表の模様をYouTubeで視聴することができる。YouTubeで「EAJRS」と検索すれば動画が見つかるので、ぜひご視聴されたい。



ブース展示の様子（1）



口頭発表の様子（後藤）



ブース展示の様子（2）

PNC2017にて総合資料学システムに関する研究発表

後藤 真

2017年11月6日、台南の成功大学にて行われたPacific Neighborhood Consortium (PNC) 2017にて、後藤が総合資料学のシステムのうち、とくに空間情報を含む部分についての研究報告を行った。

PNCは、人文情報学に関する国際会議で、今回は13か国164名の参加者があった。空間情報を含む歴史資料のデータのマップ

グは、現在さまざまな文脈から注目されており、今回も多くの研究事例が発表されると同時に活発な議論も行われた。今後、台湾など東アジアとの歴史資料情報の共有や連携に関する研究はさらに進めていく必要がある分野であり、実務的な仕事を進めていくことを確認した。

国際研究集会「文化財のデジタル化とその保存・活用—イギリスと日本」を開催

後藤 真

日時 2017年11月22日(水) 17:45 ~ 20:10

会場 尚友会館 8 階会議室 (東京都千代田区霞が関3-3-1)

2017年11月22日、東京都千代田区の尚友会館にて、歴史民俗系博物館協議会関東ブロックとの共催で、国際研究集会「文化財のデジタル化とその保存・活用—イギリスと日本」を行った。文化財保護法の「改正」が取りざたされる昨今、デジタル化を含めた、博物館の意義が再度問われようとしている。今回は、英国ウェールズ国立博物館長デイビッド・アンダーソン氏の来日にともない、特にウェールズの博物館展示の特性についてお話をいただき、後藤からは日本の文化財のデジタル化の最新の状況について説明を行った。討論では、データ提供の際に「何を正しいデータとして」提供するのかといった話題や、「ウェールズ」というイングランドとは異なる位置をもとにした展示とWebでの表現手法 (例えば、ウェールズ国立博物館のWebサイトは英語だけではなく、ウェールズ語でも記されているなど) といった点についてが話題となった。今後も、総合資料学の創成事業では、海外動向や機関とも連携を深めつつ、デジタルネットワーク構築を進めていく。

講演

「イギリスにおける文化財の保存と活用について—ウェールズ国立博物館の実践をふまえて—」
デイビッド・アンダーソン David Anderson
(英国ウェールズ国立博物館長)

報告

「日本における文化資源と歴史資料の大規模デジタル化の現状と課題」 後藤 真 (国立歴史民俗博物館・准教授)

討論

(司会: 久留島 浩 国立歴史民俗博物館長)
デイビッド・アンダーソン、後藤 真
三木美裕 (国立歴史民俗博物館・客員教授)

閉会挨拶

小林淳一 (東京都江戸東京博物館・副館長)

主催

国立歴史民俗博物館「総合資料学の創成」事業
(メタ資料学研究センター)
全国歴史民俗系博物館協議会関東ブロック
(関東ブロック集会)



デイビッド・アンダーソン氏の講演



討論の様子 (左から久留島、三木、後藤、アンダーソン)



討論の様子

歴史民俗資料館等専門職員研修会で総合資料学の講義を実施

後藤 真

2017年11月15日、歴史民俗資料館等専門職員研修会(歴民研修)のテーマ別演習として、総合資料学の講義を実施した(後藤・橋本・天野)。まず、後藤より日本における博物館資料のデジタル化の現状と今後の可能性について概況説明を行った。特に、巨大なデジタル化の動向と、今後の博物館の可能性について述べるとともに、



講義の様子

データの利活用と保存の問題について説明を行った。2000年前後から、現在までの状況を俯瞰し、オープン化や機械における活用の動向などを述

べ、各機関の実情を聞くなどの討論を行った。

次に橋本より歴史資料のデジタルデータ活用の新たな形として、クラウドソーシングによる可能性について説明を行い、その後「みんなで翻刻」を実際に触りつつ、その機能と有用性について学んでもらう機会を提供した。

最後に天野より、これらのデータをより地域の中で活かしてもらうための一つの例として文化財防災に関する事例と、その課題について説明を行った。文化財の基礎データの蓄積が、災害時の歴史資料のレスキューに役立つという可能性について述べるとともに、通常時には歴史文化の理解等への活用を行うことができるという事例について説明を実施した。

歴史文化資料のデジタル化や、その活用について、多くの歴史民俗系博物館・資料館と課題共有を行うことができ、今後の総合資料学と各地の博物館の連携のための素地を作ることができた。このような、研修での説明を通じて、今後も広く総合資料学とは何かということや、その意義を伝えていきたい。

「山形民俗映像フォーラム・黒川能（王祇祭）1954年／2006年」を開催

内田 順子

日時 2017年10月9日(月)祝 10:30~11:50

会場 山形美術館2階(山形市)

2017年10月9日、山形大学附属博物館が中核館となって組織する山形文化遺産活用事業実行委員会とともに、「山形の文化遺産を世界に発信するプロジェクト」の一環として、「山形民俗映像フォーラム・黒川能（王祇祭）1954年／2006年」を開催した。

黒川能は山形を代表する民俗芸能で、春日神社の王祇祭などの神事で奉納される。今回のフォーラムでは、1954年撮影の「王祇祭」（日本大学芸術学部映画学科製作、山形県教育センター蔵）と、2006年撮影の「王祇祭」（内田長志撮影・編集、国立歴史民俗博物館蔵）の2つの映像を上映し、その後のトークセッションにおいて、学術資料として分析・研究する論点を映像からどのように引き出せるか試みた。

1954年撮影の「王祇祭」は、16ミリフィルムを4Kスキャンして作成したデジタルリマスター版で上映した（協力：株東京光音）。人びとが身につけている衣服の模様や、背景に写り込んでいる文字などが、よりくっきり見えるようになり、1954年の王祇祭の現場の情報がより豊かに得られることがわかった。また2006年の映像との比較



上映中の様子

では、環境や気候の変化、子どもの減少、王祇祭に参加する人びとの様子の変化など、興味深い論点を導き出すことができました。

1954年撮影の「王祇祭」の冒頭には、「王祇祭編 真壁仁著『黒川能』より」というタイトルが挿

入されている。真壁仁は山形を代表する詩人であり、『黒川能』（1953年）を出版して黒川能を世に紹介した人物である。同書中に「映画や音盤などにも記録してゆかなければならない」とあることから（フォーラム開催後、村山民俗学会の大江良松氏よりご教示をいただいた）、本映画の制作に真壁がどのように関わっていたのか、民俗記録映画の制作論としても興味深い論点を提供する素材であることがわかった。



トークセッションの様子（1）



トークセッションの様子（2）
（右から岩鼻・市村・三上・内田）

トークセッション 市村幸夫（村山民俗学会）、岩鼻通明（山形大学農学部）、内田順子（国立歴史民俗博物館）、三上喜孝（国立歴史民俗博物館）

司会 佐藤 琴（山形大学）

主催 大学共同利用機関 法人国立歴史民俗博物館・山形文化遺産活用事業実行委員会

協力 株式会社東京光音

じんもんこん2017歴博共催企画セッションを開催

橋本 雄太

日時 2017年12月10日(日) 9:45~11:45

会場 大阪市立大学学術総合センター

2017年12月10日、「人文科学とコンピュータシンポジウム2017」（じんもんこん2017）第2日目のプログラムとして、歴博共催企画セッション「歴史研究と人文研究のためのツールを学ぶ」を開催した。

「人文科学とコンピュータシンポジウム」（じんもんこん）は、情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会が主催する、人文情報学分野の年次研究大会である。人文情報学に関係する研究の中には比較的容易に使えるツールが多数含まれている。それらのツールを活用し、人文学の多くの成果を出していくことは、さらなるツールの可能性を導き出し、ツールのさらなる開発へとも繋がる。

人文情報学は「総合資料学の創成」事業の重要な柱であり、歴史研究に情報技術を活用するモデルの構築が求められている。総合資料学で行なっている事業では、基本的には大型のデータベースやシステムの構築を中心としているが、基礎ツールを理解し、歴史研究への可能性を模索することも欠かすことのできない重要な要素である。

上のような趣旨のもと、共同研究（人文情報ユニット）メンバーの関野氏やメタ資料学研究センターの橋本など、人文情報学分野で活動する7名の研究者により、8つのツールのチュートリアルを実施した。内容は右記の通りである。

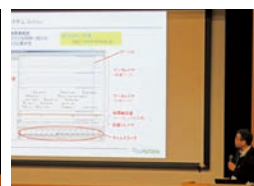
各発表者が使用した資料や参考URLを「歴史研究と人文研究のためのツールを学ぶ」Webページ集として、「総合資料学の創成」ブログに掲載してあるので、ご関心の向きは参照されたい。会場の聴講者からは来年度の開催を求める声も上がり、人文学研究の支援ツールについての関心の高さが伺われた。

内容

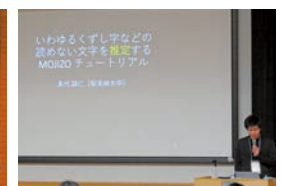
- デジタルアーカイブ管理ツールであるOmeka チュートリアル 中村 寛（東京大学）
- 時間情報システム HuTime チュートリアルー 暦の変換 関野 樹（総合地球環境学研究所）
- くずし字などの読めない文字を推定するMOJIZO チュートリアル 末代誠仁（桜美林大学）
- みんなで翻訳 橋本雄太（国立歴史民俗博物館）
- くずし字アプリ 橋本雄太（国立歴史民俗博物館）
- KH Coder 上阪彩香（大阪大学）
- IIIF Curation Viewer 鈴木親彦（人文学オープンデータ共同利用センター〈CODH〉）
- 異体字セレクトアセクタ 王 一凡（東京大学大学院）



Omekaのチュートリアル
（中村）



HuTimeのチュートリアル
（関野）



MOJIZOのチュートリアル
（末代）

他機関における活動のご紹介

山形大学附属博物館と総合資料学 90年のさらにその先へ

山形大学附属博物館 佐藤 琴

山形大学附属博物館（以下「当館」と略す）は2017年度の特別展として「山形大学附属博物館ものがたり 収蔵品が語る90年のエピソード」（会期：6月12日～8月18日）を開催した。この展示は、国立大学の大学博物館が一同に会する「大学博物館等協議会第20回大会（山形大会）」の開催（6月22～23日）に合わせ、当館の歴史と収蔵資料を紹介するために実施したものである。タイトルに冠したように、当館の歴史は前史を含めれば90年を越える。ささやかではあるが、当館の長い歩みを他の大学博物館や地域の方々へ周知することが目的であった。

当館の前史の一つは1927（昭和2）年に開館した財団法人山形県教育会館の郷土博物館である。当時、日本は国をあげて郷土教育に取り組んでおり、山形においても郷土調査や学校関係者の郷土教育に関する研究などが盛んに行われていた。その拠点として山形県教育会館新館が建設され、その2階に、既にあった山形県郷土博物館（1924〈大正13〉年開館）の資料を移管し、郷土博物館として開館したのである。

その直後の1928（昭和3）年には山形県郷土研究会が発足した。事務室は山形県教育会館に置かれ、主な会員は、当時の山形高等学校、山形師範学校の歴史・地理・博物学等の教師であった。初代会長に就任した三浦新七（1877～1947）氏は東京商科大学（現・一橋大学）の学長を務めた山形県出身の経済学者である。折しも、昭和の金融恐慌の嵐が吹き荒れ、三浦氏は家業復興のため故郷に戻り、山形第八十一国立銀行（現・山形銀行）の頭取に就任し、山形県下の金融機関を立て直しに尽力していた頃だった。三浦氏は会長として郷土に密着した実証的な研究を指導し、そのために必要な膨大な資料の調査および収集にかかる費用を惜しみなく援助したという。

もう一つの当館の前史である山形師範学校郷土室は、ほぼ同時期の1929（昭和4）年に設置された。翌年の1930（昭和5）年、文部省から全県の師範学校に郷土資料収集のための予算が配当され、それを使い切るために山形で奮闘したのが、着任間もない、若き地理学者・長井政太郎（1905～83）氏である。後に初代山形大学附属郷土博物館長（在任期間1952～70年 なお1978（昭和53）年より「山形大学附属博物館」と改称）となる長井氏は、当時の山形県郷土研究会の最年少の会員でもあり、三浦氏の指導・支援を受けつつ、郷土室の整備にあたったものと推測される。また、郷土室については『郷土研究資料目録』（1933〈昭和8〉山形師範学校刊）により、往時の姿をしのぶことができる。記載されている資料の一部は現在もお当館に収蔵されている。

そして、太平洋戦争末期の1944（昭和19）年に山形県教育会館は海軍に接収されることとなり、郷土博物館の資料の処遇が問題となると、長井氏は、師範学校側の反対にあいつつも、個人的に引き受けるというかたちで、生物関係以外の資料を山形師範学校郷土室に移管したと、後の回想で語っている。

これらの資料をベースにさらなる収集活動を続け、山形大学の創設（1949〈昭和24〉年）から間もない時期（設立年月日は不詳）に当館は誕生した。そして、1951（昭和26）年に博物館法が制定

された直後に、初めて行われた「博物館に相当する施設」の指定を受けた。他に国立大学の博物館で相当施設に指定されているのは、植物園や水族館を除くと、北海道大学附属博物館（現・北海道大学総合博物館）、秋田大学鉱山学部附属博物館（現・秋田大学国際資源学部附属鉱業博物館）、東京農工大学繊維学部附属繊維博物館（現・東京農工

大学科学博物館）、岐阜大学学芸部附属郷土博物館（現・岐阜大学教育学部郷土博物館）、宮崎大学農学部附属農業博物館のみである。

戦争を経て大半が閉室を余儀なくされた郷土室だが、山形においては長井氏の尽力によって存続しただけでなく、山形県郷土博物館の資料も救われた。そして、長井氏は山形大学附属博物館の創設直後から、山形市内に所在する唯一の博物館として、地域に所在する資料の収集・保存・展示・普及に力を注ぎ、当館の礎を築いたのである。

長井氏の収集は博物館にとどまらず、個人としても4千点を超える山形の近世文書のコレクションをつくりあげていた。それらは現在「長井政太郎収集文書」として山形市内に所在する3施設（当館、山形県立博物館、山形県郷土館（文翔館））に分蔵されている。

また、三浦氏のもとにも5千点以上の近世文書が残された。これらは「三浦文庫」と名付けられ、当館が保管している。前述のとおり「三浦文庫」は三浦氏自身の研究のためではなく、長井氏らの研究を支援するために、集められたものと推測される。2人の研究者が年齢差や専門分野の違いを越えて、地域の歴史研究のために尽力した結果が当館のコレクションの核である。この二つの資料群は現在も頻繁に内外の研究者に利用されている。

以上のとおり、当館は、極めて小規模ながらも90年にわたって活動し続けてきた博物館である。黎明期から郷土・山形に立脚し、上記以外にもさまざまな分野の研究者が関わってきた。まさに総合資料学の考え方に近い活動を実践し続けてきた機関であると言ってよいだろう。2017年度よりスタートした国立歴史民俗博物館の奨励研究では「長井政太郎収集文書」を取り上げ、そのさらなる活用に向けた取り組みを共同で検討し、実践していく。

90年のさらにその先へと、当館が存在することの意義をさまざまな機会をとらえて伝え続けていく。それが当館の総合資料学への取り組みである。



平成29年度山形大学附属博物館特別展

総合資料学におけるモノとしての理工系資料の可能性

東京工業大学博物館 阿児 雄之

総合資料学は、多様な「モノ」資料を既存の学問分野を超えて結びつけ、統合的に分析することによって新たな日本歴史像の構築、学問領域の創成を目指している。この総合資料学を推進する3つの活動ユニットには、歴史学者はもちろん、多くの自然科学者、理工学者が加わっている。中でも、「人文情報ユニット」には、資料情報を統合的に扱う情報基盤環境の整備を目的として、情報学に携わる研究者が多く加わっている。また、「異分野連携ユニット」には、ある資料と課題を設定し、歴史学や文化財科学といった多岐にわたる分野の研究手法をもって、その分析・解決に向けたアプローチを検討している。

このような中で、東京工業大学という理工系に特化した大学の博物館に所属している筆者は、「地域連携・教育ユニット」に属している。このユニットは、「文理融合の研究成果を活用した地域での研究や教育を検討するユニット」である。前者の2ユニットにおける自然科学・理工学の関わりは、当該学問領域で開発・発展してきた手法の歴史資料への適用という側面が大きいと感じている。それに比して、「地域連携・教育ユニット」における理工系博物館には、「モノ」としての理工系資料を総合資料学の中でいかに活用出来るかということが期待されていると捉えている。

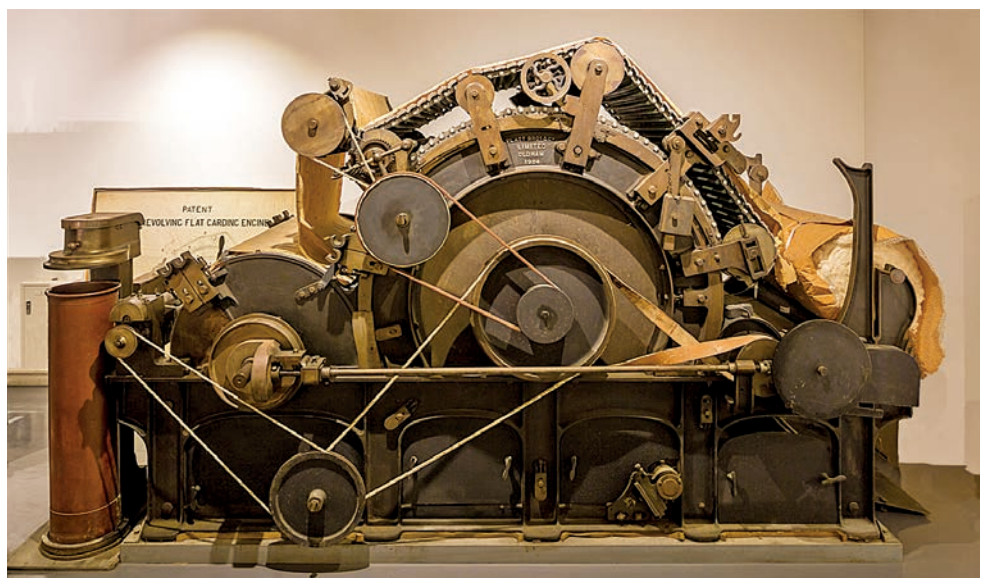
東京工業大学は、1881（明治14）年に東京職工学校として創設されて以降、工業の発展を支える人材を社会に輩出してきた。東京工業大学博物館は、東工大で生み出された教育と研究の歴史的成果、現在進行している様々な先端研究や社会への応用実績、本学卒業生の社会における成果等を収集・調査・保存・研究及び伝承することにより、社会に向けて広く発信することを目的として活動している。研究者以外には歴史的資料としてみられないこともしばしばあるが、当博物館における収蔵資料は、近現代の日本における工業（科学・技術）の教育・研究の歴史を構築する際には欠かせない資料であると言える。

これら貴重な資料を体系的に整理保存し活用するために、当館はこれまで機能を次々と拡充してきた。博物館的活動は、創立100周年記念事業の一環として計画された百年記念館竣工時から始まり、2011（平成23）年には博物館を設立するに至った（百年記念館が博物館相当施設として指定）。さらに、2013（平成25）年に、本学の歴史ならびに日本における工業教育史に関わる大学法人文書や記録資料の収集・調査・保存・公開を目的とした資料館が設立され、2015（平成27）年に国立公文書館等の指定を受けた公文書室が設置された。そして、現在では

全国でも稀な博物館機能（Museum）と公文書館機能（Archives）を同時に有する組織へと成長している。

活動を通じ、収集・調査される資料の種類が拡大し、数量が増加するにつれて、他機関が所蔵している資料との関連性も増してきている。例えば、国立歴史民俗博物館に所蔵されている「近現代陶磁器・窯道具関係資料」や「近代紡績業関係資料」は当館の収蔵品とも関係深く、これらが結びついていくと新たな知見が見出されてくるかもしれない。「近現代陶磁器・窯道具関係資料」に含まれている「赤絵鉢」を製作した濱田庄司、彼のもとで修行を積み「象嵌赤絵草花文扁壺」を製作した島岡達三。共に重要無形文化財保持者（民芸陶器）であった彼らは、東京工業大学の卒業生（濱田は東京高等工業学校窯業科卒、島岡は東京工業大学窯業学科卒）である。また、「近代紡績業関係資料」に含まれている「絹織物の栞」は東京高等工業学校紡織科からのものと記されている。これら歴博所蔵資料は近代の陶磁器業や紡績業を語る「モノ」であるが、当館の資料とつながることによって、その「モノ」を製作したヒトや技術的基盤といったより豊かな当時の社会状況を描き出すことが可能になるのではないだろうか。当館が所蔵している卒業アルバムや講義シラバスを参照すれば、濱田や島岡が学生時代に学んでいた内容を推測可能である。また、当館所蔵の紡織機類を動態展示すれば、紡織科の実習風景を追体験することも可能である。

単一の資料を単一の視点で見ただけでは得られない、このようにどこまでも繋がりが広がっていく歴史の姿を「地域連携・教育ユニット」は提示できる可能性を秘めている。現状では、資料の中でも人文科学分野にて研究が進んできた歴史資料を対象とした議論展開が中心である。今後、理工系資料をも交えた活動展開の道筋について協力・検討していければと考えている。



フラットカード（梳綿機） 東京工業大学博物館蔵

研究メンバー一覽 (氏名/所属) *所属は平成30年3月時点のもの。

◎ 研究代表者、○ 研究副代表者、各ユニット代表・副代表以外のメンバーは館外→館内の順で五十音順に記載

総括

久留島 浩 (国立歴史民俗博物館)

メタ資料学研究センター長

林 部 均 (国立歴史民俗博物館)

人文情報ユニット

- | | |
|------------------------------|---------------------|
| ○ 後 藤 真 (国立歴史民俗博物館 *ユニット代表) | 関 野 樹 (総合地球環境学研究所) |
| 橋 本 雄 太 (国立歴史民俗博物館 *ユニット副代表) | 高 田 良 宏 (金沢大学) |
| 宇 陀 則 彦 (筑波大学) | 研 谷 紀 夫 (関西大学) |
| 大 向 一 輝 (国立情報学研究所) | 百 原 新 (千葉大学大学院) |
| 岡 田 義 広 (九州大学) | 山 田 太 造 (東京大学史料編纂所) |
| 五 島 敏 芳 (京都大学総合博物館) | 内 田 順 子 (国立歴史民俗博物館) |
| 新 和 宏 (千葉県立中央博物館分館海の博物館) | 大久保 純 一 (国立歴史民俗博物館) |

異分野連携ユニット

- | | |
|------------------------------|---------------------|
| 三 上 喜 孝 (国立歴史民俗博物館 *ユニット代表) | 荒 木 和 憲 (国立歴史民俗博物館) |
| 渋 谷 綾 子 (国立歴史民俗博物館 *ユニット副代表) | 小 倉 慈 司 (国立歴史民俗博物館) |
| 岩 崎 奈緒子 (京都大学総合博物館) | 齋 藤 努 (国立歴史民俗博物館) |
| 小 川 正 人 (北海道博物館) | 高 田 貫 太 (国立歴史民俗博物館) |
| 栄 原 永遠男 (大阪歴史博物館) | 原 山 浩 介 (国立歴史民俗博物館) |
| 山 家 浩 樹 (東京大学史料編纂所) | 日 高 薫 (国立歴史民俗博物館) |
| 青 山 宏 夫 (国立歴史民俗博物館) | |

地域連携・教育ユニット

- | | |
|------------------------------|---------------------|
| ◎ 西 谷 大 (国立歴史民俗博物館 *ユニット代表) | 宮 武 正 登 (佐賀大学) |
| 天 野 真 志 (国立歴史民俗博物館 *ユニット副代表) | 藪 田 貫 (兵庫県立歴史博物館) |
| 阿 児 雄 之 (東京工業大学博物館) | 荒 川 章 二 (国立歴史民俗博物館) |
| 伊 藤 昭 弘 (佐賀大学) | 小 池 淳 一 (国立歴史民俗博物館) |
| 奥 村 弘 (神戸大学) | 鈴 木 卓 治 (国立歴史民俗博物館) |
| 崎 山 直 樹 (千葉大学) | 関 沢 まゆみ (国立歴史民俗博物館) |
| 篠 原 徹 (滋賀県立琵琶湖博物館) | 村 木 二 郎 (国立歴史民俗博物館) |
| 島 立 理 子 (千葉県立中央博物館) | |

メタ資料学研究センター・メンバーの紹介

センター長

林部 均 HAYASHIBE Hitoshi

研究部・考古研究系 教授

専門分野 日本考古学（主要研究課題：東アジアの王宮・王都の研究、考古学からみた古代地域社会の研究）

三上 喜孝 MIKAMI Yoshitaka

研究部 教授

専門分野 日本古代史（主要研究課題：東アジア文字文化交流史、古代地域社会史、貨幣史）

内田 順子 UCHIDA Junko

研究部・民俗研究系 准教授

専門分野 音楽学・民俗学（主要研究課題：音と社会の関わりについての民俗学的研究）

橋本 雄太 HASHIMOTO Yuta

研究部 助教

専門分野 情報歴史学（主要研究課題：歴史資料を対象にしたクラウドソーシング、学習システムの構築）

副センター長

後藤 真 GOTO Makoto

研究部 准教授

専門分野 人文情報学・情報歴史学・総合資料学（主要研究課題：歴史情報のデジタル化やデジタル・アーカイブ、総合資料学の構築など）

小倉 慈司 OGURA Shigeji

研究部・歴史研究系 准教授

専門分野 日本古代史、史料学（主要研究課題：古代神祇制度、禁裏・公家文庫、延喜式）

天野 真志 AMANO Masashi

研究部 特任准教授

専門分野 日本近世・近代史、史料学（主要研究課題：近世・近代移行期政治・文化史、地域歴史文化の保存と継承）

渋谷 綾子 SHIBUTANI Ayako

研究部 特任助教

専門分野 考古科学・文化財科学、総合資料学（主要研究課題：総合資料学、先史時代の植物食文化と健康状態の復元）

新刊紹介

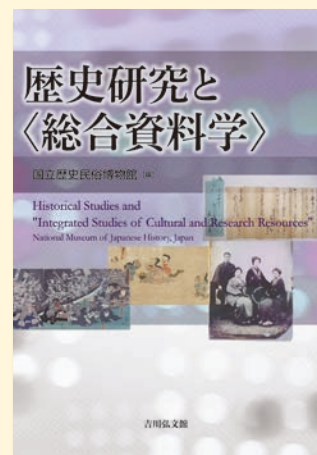
分野を超えた共同研究が新たな歴史学を切り拓く

歴史資料を多面的に検証し、その情報を蓄積・発信・還元することをめざす〈総合資料学〉。古文書や絵画資料、刀剣、貨幣などを題材にした、研究の具体像に迫る多数の実践例を紹介する。自然科学や民俗学、デジタル技術など、分野の垣根を越えた共同研究によって得られる、多彩な新知見の数々。総合資料学が切り拓く、歴史研究の新たな可能性とは。

国立歴史民俗博物館編『歴史研究と〈総合資料学〉』

株式会社 吉川弘文館発行 2018年3月1日 A5版、本体3,200円（税抜）

はじめに…久留島浩／日本における人文情報学の全体像と総合資料学…後藤 真／Ⅰ デジタルデータの研究活用（洛中洛外図屏風をデジタルで読む—人物データベースの試み…小島道裕／江戸図屏風を起点に他の風景と比べたら何がわかるか？…鈴木卓治・大久保純一／コラム1 総合資料学とフィールド調査…西谷 大・島立理子・後藤真・橋本雄太）／Ⅱ 資料の多角的分析による研究実践（正倉院文書の複製を活用する—古文書を多角的に分析する1…小倉慈司／民俗研究における文書の扱い—古文書を多角的に分析する2…小池淳一／顕微鏡を用いた古文書料紙の自然科学分析の試み—古文書を多角的に分析する3…渋谷綾子・小島道裕／コラム2 人物研究と文書・写真・墓石…樋口雄彦／江戸末期の風刺画に見る妖怪表現…大久保純一／日本刀の刀身を作る…齋藤 努／民俗学からみる貨幣…関沢まゆみ）



*ニューズレター3号におきまして、表紙の写真キャプションが誤っておりました。「正倉院文書の熟覧（8月地域連携・教育ユニット研究会）」とありますが、正しくは、「正倉院文書の熟覧（8月異分野連携ユニット研究会）」です。大変申し訳ありませんでした。

2017年9月～2018年度 メタ資料学研究センターの活動

2017年度

- 2017/9/13(Wed)～16(Sat) EAJRS2017 日本資料専門家欧州協会
(オスロ大学〈ノルウェー〉、後藤真・渋谷綾子・橋本雄太) <http://ejrs.net/>
- 2017/9/26(Tue) 人文情報ユニット研究会第2回 iPRES 2017 歴博セッション「Digital Curation of Historical and Cultural Resources in Japan 2: 歴史資料デジタル記録として何を記述すべきか—日本とアジアと世界—」
(京都大学百年時計台記念館 ホール) <https://ipres2017.jp>
- 2017/10/9(Mon) 山形民俗映像フォーラム・黒川能(王祇祭) 1954年/2006年(山形美術館、内田順子・三上喜孝)
- 2017/11/7(Tue)～9(Thu) Pacific Neighborhood Consortium (PNC) 2017(国立成功大学〈台南〉、後藤真)
- 2017/11/13(Mon) 地域連携・教育ユニット研究会第2回「日伊の文化財情報システムに関する研究会」(神戸大学文学部)
科学研究費基盤研究(S)「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて」との共催
- 2017/11/15(Wed) 歴史民俗資料館等専門職員研修会(国立歴史民俗博物館、後藤真・橋本雄太・天野真志)
- 2017/12/2(Sat) 総研大文化フォーラム2017「文化を〈はかる〉—文化科学へのまなざし—」
(国立歴史民俗博物館、後藤真・橋本雄太)
- 2017/11/22(Wed) 国際研究集会「文化財のデジタル化とその保存・活用—イギリスと日本」(尚友会館)
- 2017/12/9(Sat)・12/10(Sun) 人文情報ユニット研究会第3回(大阪市立大学) じんもんこん2017との共催
- 2018/1/4(Thu)～7(Sun) AHA2018 アメリカ歴史学協会第132回大会
(アメリカ、後藤真・渋谷綾子)
- 2018/1/22(Mon) 異分野連携ユニット研究会第3回(国立歴史民俗博物館)
- 2018/2/7(Wed) 人文情報ユニット研究会第3回(メルパルク京都)
- 2018/3/17(Sat) 平成29年度全体集会(長崎大学)
長崎大学大学院多文化社会学研究科創立記念/長崎大学・国立歴史民俗博物館連携協定記念シンポジウム
歴博共同研究「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」平成29年度全体集会
「資料がつなく大学と博物館～歴史文化の地域的・国際的展開～」

【内容】

第一部 総合資料学の成果と課題

趣旨説明 後藤 真(国立歴史民俗博物館)

活動報告1「人文情報ユニット」後藤 真(国立歴史民俗博物館) / コメント 永崎研宣(一般財団法人人文情報学研究所)

活動報告2「異分野連携ユニット」渋谷綾子(国立歴史民俗博物館) / コメント 崎山直樹(千葉大学)

活動報告3「地域連携・教育ユニットと資料防災」天野真志(国立歴史民俗博物館) / コメント 添田 仁(茨城大学)

第二部 資料がつなく大学と博物館

I 多文化社会学の未来

「長崎大学大学院多文化社会学研究科について」首藤明和(長崎大学)

「モノから見る多文化社会学」木村直樹(長崎大学、事例1)・野上建紀(長崎大学、事例2)

II 大学と地域歴史文化資料の調査・研究・展開

・九州大学附属図書館付設教材開発センター 石 偉(九州大学)

・佐賀大学地域学歴史文化研究センター 伊藤昭弘(佐賀大学)

2018年度

日本アート・ドキュメンテーション学会(Japan Art Documentation Society、JADS) 共催・国際研究集会(2018年6月)
(国立歴史民俗博物館)



ResourceのRをベースとし、古文書や軸物など歴史資料をはじめとする人文系のイメージと顕微鏡や虫眼鏡などの理系のイメージをあわせて総合資料学のめざす文理連携研究を象徴しています。



総合資料学ニュースレター 第4号 2018年(平成30)3月23日 発行

編集発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館 メタ資料学研究センター

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117番地
TEL 043-486-0123(代表) <http://www.metaresource.jp/>

印刷 株式会社 正文社